

『教職研究』第4号 刊行の辞

平成国際大学
教職支援センター長 坂本 保富

歳月の流れは実に速いもので、本誌も第4号を数えることになった。その間、多くの先生方に玉稿をお寄せ頂き、お陰さまで地域の教育委員会や学校関係の皆様方からは、各論文の内容はもちろん、論文に付された必要史料や参考文献が豊富で、現場の教育実践に役立つ有益な論文が多いと、高評を賜って参りました。そのような地域の読者の声は、論文執筆の苦勞を癒すに値する嬉しい言葉の数々である。読者各位に改めて御礼を申し上げる次第である。

そもそも、本誌が誕生する契機となったのは、①本学に教職支援センターが設立され、そこで教職志望の学生たちを指導する教育と研究に熱心な特任教授の先生方をお招きしたこと、そして、②その教職支援センターが中心となって、地域貢献の一貫として「教員免許状更新講習」を平成27年より始めたことである。特に、後者②の教員免許状更新講習では、受講される学校現場の先生方の教育目線で、本学の先生方が自己の専門分野における最新の知識や情報を提供するために、さらには、それらを基にした研究の成果を、平易に理解しやすく集中講義できるようにと、事前の関係資料の収集と分析には非常に苦心され、多くの時間を費やされている。

さらに、教員免許状更新講習が終了した後は、受講された先生方の授業に対する評価と感想を拝見し、次年度には、より充実した授業内容に改善したいと反省されているのである。

そこで、教職支援センターとしては、本年度実施した教員免許状更新講習の内容を、現実的な反省と次年度への希望の喚起を込めて、厳しく振り返り、授業内容の一部あるいは全体、さらには関係する探究事項を研究課題として設定し、論文にまとめることを奨励し、論文集として内外に刊行・配付する提案をした次第である。ここに、本誌が誕生するに至った契機があったのである。それ故に、執筆される先生方は、講習が終了して一段落した秋以降に、論文執筆を開始され、師走の多忙な時期にまとめられるのである。

教育、特に大学の教育は、教師自身の問題に対する心底からの納得を求めた「深い学び」の研究活動が普段に求められる。研究なくして教育はないのである。教師自身の必死の学びの集合体が、大学全体の学生に対する教育の質的向上をもたらすのである。「働かざる者は食うべからず」(He who does not work, neither shall he eat.) との有名な言辭がある(新約聖書『テサロニケの信徒への第二の手紙』)。この明言は、「研究せざる者は教えるべからず」という教育と研究の相関性にも通底するのではないか。何と厳しい言葉であることか。しかし、教わる学生の将来の人生に深く関わる先生方の教育は、単なる知識・技術の伝達の域を超えて、学生の「生きる力」を育む希望に満ちた価値的活動なのである。

今後も、本学が、教員免許状更新講習などを通して地域貢献の実をあげ、そして学生の「生きる力」を喚起し育成できる学力と人間力の豊かな教員を養成し輩出していくためには、地域の教育委員会や学校現場の先生方との協力が不可欠で、共に学び会いながら成長していく協働的關係の構築が求められる。そのために大学の先生方は、日々、研究と授業の創造的活動を繰り返し、自らを螺旋状型の成長曲線に導く学道修行として、普段に論文を書くという難題に挑戦して頂き

たい。

そのためには、本誌に掲載された論文を熟読玩味され、次回は、それを乗り越えた論文を書き上げたいとの決意の下、内から湧き起こる研究者としての自己変革への衝動を顕在化し、学問という切磋琢磨の競争的世界を逞しく生きていていただきたい。

以上は、新春の巻頭に、古稀を過ぎた老学の戯言を記したまでのこと。どうぞご寛恕下さい。